

近代日本の医療活動の意味

山口 静子

多摩大学医療介護ソリューション研究所

この度も、明治元年（1868）～昭和20年（1945）終戦までの医療活動を検討する。

①**明治維新とは何か**：江戸幕府は安政元年（1854）日米・日英・日露和親条約を結び開国、安政5年（1858）に日米・日蘭・日露・日英・日仏と修好通商条約を調印した。鎖国で保たれていた封建制社会は経済も政治も急速に分解し幕藩体制は倒れる。この安政の条約は、日本の主権を制限し半植民地市場として欧米資本主義に従属させた。慶応3年（1867）10月徳川慶喜は大政奉還を許され、12月9日岩倉・西郷・大久保等は王政復古の号令を発し、天皇政府樹立を宣言した。徳川家康から265年続いた幕府は倒れ約700年続く武家政権も終わる。新政権は戊辰戦争を戦い、慶応4年（1868）3月天皇が日本国元首であると宣言し五箇条の誓文を発し公議思想に基づく方針を示す。明治元年（1868）9月明治維新、政府は江戸を東京に年号を明治に改めた。明治2年（1869）都を京都から東京に移し明治天皇も皇居（江戸城）に移る。明治4年（1871）全権大使岩倉具視を団長に48名を欧米使節団に派遣。目的は条約改正の予備交渉と西洋文明を実地に視察する、である。佐々木潤之助は、新政府は国内の諸制度を統一し中央政権化を進め近代国家の元を開き、明治22年（1889）大日本帝国憲法を發布、明治23年（1890）には第1回帝国議会開催、近代国家像は完成する。幕末から続くこの一連の改革を明治維新、と言う（『江戸時代論』）。また井上清は、江戸幕府が締結した安政の条約は改正されるには、明治44年（1911）日米・日英・日独修交通商航海条約（関税自主権の確立）まで57年経過した。ようやく日本は国際的に近代国家と認められた、と説く（『日本の歴史』）。

②**近代日本の医療活動とは何か**：小川鼎三は、明治維新の時政府はドイツ医学を採用しドイツ人教師にて東京大学医学部を整え、養成した医師達を他に及ぼす中央集権的な方針であった。明治の終わりには医学校での医学教師は日本人となる。後進国日本がドイツを模範とし、ドイツ医学の基礎臨床医学の選択は間違いなかった。ドイツ医学の隆盛は第一次世界大戦頃までであり、その後は日本人自身で医学研究を進め昭和には日本医学の水準を高めた、と説く（『医学の歴史』）。坂井建雄は、幕末にはオランダ軍医ボンベ明治期にはドイツ人教師にて輸入された医学は西洋近代医学であり、医学校と病院を通して西洋近代医学と医療は全国に広まった。また昭和20年（1945）終戦、無条件降伏の日本はGHQの指導下衛生行政の改革が行われ、明治維新後初めて変革期を迎えた、と説く（『医学全史』）。宮本忍は、幕末長崎にてボンベ指導下にてコレラ流行対処法を直接体験した松本良順と長与専斉は、西洋近代医学の衛生学から松本良順は個人衛生へ長与専斉は公衆衛生へ進む、と説く（『医学思想史III』）。岩倉具視の欧米使節団にその長与専斉が居た。長与専斉は帰国後医務局長を命じられ、明治7年（1874）医制76条を公布。当時は動乱期であるため急がず現状に即する方針をとる。川上武は、医制は衛生行政機構の確立・学制と西洋医学に基づく医学教育の確立・医師開業免許制度の構築・近代薬舗制度と医薬分業を目指した。医学教育と医師制度重視は近代医療技術を習得した医師が登場しないと明治政府の衛生行政は進まない、と説く（『現代日本医史』）。筆者は、松本良順は佐藤泰然学統であり基礎臨床医学を発展させ近代医学衛生学の個人衛生を予防医学へと開拓、長与専斉は緒方洪庵適塾に学び長崎にてボンベに師事し衛生学を知る。欧米使節団に随行、西洋文明を体験これは公衆衛生行政に繋がった、と考える。

③**結論**：世界的なウイルス禍にある現在、感染状況は他諸国と違う、この違いは何故生じるか。明治初期松本良順の東洋的養生思想と長与専斉の西洋衛生思想が近代日本の衛生学を牽引し、後続の努力は予防医学の実行を行政組織の市町村や学校職場まで行届く。命と健康を守る医師・薬剤師の他、保健師・助産師・看護師・養護教諭・衛生管理者等の医療者は日本人の生活に健康意識を定着さす、これは日本の特徴だろうか検証を続ける。